

コピー・ファックス機を支援

心をひとつに産業の復興・再生を成し遂げよう

(岩手地本)

2012年03月31日～4月2日 組織拡大と災害支援

岩手地本では、昨年の大震災・大津波による甚大な被害を受けた三陸地方の大船渡市で組織拡大行動を実施致しました。本格的な春を迎えた大船渡市で森委員長と東館書記長が駅・病院・仮設の事業所を訪ね、岩手地本作成の組織拡大チラシを手渡し、こんな時だからこそ会社に組織を作って全自交に加入し、心一つに産業の復興・再生を成し遂げようと呼びかけして回りました。



大津波によって大船渡市で業務を行っていた東海タクシー、菅野タクシー、大船渡タクシーは事業所と車両を大船渡駅とともに流失破壊されてしまい大きく変わってしまった。被害を受けた経営者と従業員は、「気持ちは不安であり、安定していない、くやしいしか出てこない」と1年経った今でもつらい気持ちを打ち明けてくれました。

また、住宅の移転場所も未だ決まらず、夜のお店は仮設であるが明かりが灯るようになった。しかし、電柱の電気はつかず真っ暗の中に明かりが灯る光景は異様に映る。

亡くなった人たちの姿を多く見たが、津波のヤローと叫んで喧嘩を売っているが、当時の悔しい気持ち、ちきしょうとの思いを誰にも言うことも出来ず、1年経った今でも悔しい思いは何も変わっていないと言う。

業務は今年の3月11日までは報道関係の貸切業務が多くあったが、それ以降は業務は激減してしまったと多くの乗務員が營收の減少の厳しさを訴える。また、事業者側は会社を運営する營收の確保が従業員の生活を守っていくこととなるが、業務が減少した今に合った勤務時間を考えたいが震災前に大きな問題であった最低賃金違反などへの対策も考えなければならず頭が痛いと言いつつも悩みを言かず。さらに、仮設ではあるが事務所を設置出来たが、震災で就業規則など業務に関係するものを無くした。新たに就業規則の作成や3・6協定を労使で結び、労使が一丸となって会社の再建・復興を成し遂げたいと決意を示した。

労働者からは、正常な生活・業務が出来ない中、組合を創ろうとは考えられない。役員の担い手がない。生きるのに精一杯など消極的な言葉が労働者から相次いだ。組合の必要性を認める声も多く聞かれた。

昨年の大震災・大津波で事業所やタクシー車両を流失・破壊された沿岸地方の事業者に対して、岩手地本では3月31日大船渡市にある東海タクシー、4月1日釜石市にある釜石タクシー、同2日には宮古市にある川崎タクシーにコピー・ファックス機の支援を行いました。